私の被災体験

稲毛田　広子　（本中山・61歳）

戦争さえなければ家も焼かれず父母との死別もなく幸福な家庭を送って行けただろうに、戦争の為私達の人生は変っていったと思います。私の家族は六人家族で、父と母そして一つ年下の妹と弟二人の理想の家族で暮してまいりました。思えば昭和二十年四月十五日、東京の大田区で長い間住みなれた土地でしたが、B29の来襲により罹災致しました。忘れる事はできません。戦後四十四年、戦争の悲惨な姿を目の前に経験してきたのですから……本当に二度と戦争はいやです。私達の青春時代等と言うものはありませんでした。戦争がはげしくなるにつけ、私達の家族もばらばらになり、小学生の弟達は茨城の親威の家へ疎開させ、私達は四人家族になり、毎日の様に警戒警報のサイレンが鳴りひびき、その度に防空壕へ逃げ込み恐ろしい思いを何度した事かしれません。その内、色々と家の事情等もあり間引き疎開をしなくてはならなくなり、そこを引っ越しする事になり大森の市の倉と言う所へ移る事になりましたが、母が余り丈夫でなかったので避難する時も大変でした。四月十五日の夜、空襲警報のサイレンが鳴り、私達家族は父を残し三人で防空頭巾をかぶり、病身の母をかかえる様にして着のみ着のまま池上本門寺と言う所まで避難場所だったと思いますが、そこまで行かぬ所で山の様な所に横穴がありそこに三人で避難しましたが、後からもぞろぞろとたくさんの人達が入って来ました。二十分程不安な時間を過していた時、近くにいた警防団の人が入ってきて「いつまでもこの穴の中にいると爆弾でも落とされたら出られなくなるから早く出た方が良い」と注意されたが、どこへ避難しても同じだからと母に言われしばらく中にいましたが、そのうち煙の様なものが入ってきたのでやむなくそこを出る事にしましたが、どこも目の前は火の海と同じでどこに逃げて良いか迷ったが、やはり本門寺の方に避難しようと言う事に、三人の足は夢中でどの道を歩いているのか全然わかりませんでした。行く先はもう空が真赤になっていました。せっかく逃げてきたのに途中で母が体の具合が悪くなってきたので少し休む事にして、細い路地に入り大きなお屋敷があったのでその家の門の横で三人が丸くなり休む事にしました。すると妹が、「あれ、姉ちゃん靴の片方を履いてないよ」と注意されたが、逃げるのが一杯でしたので全然気が付きませんでした。「もうここまで来て駄目だったら三人で死のう」と母に言われたが、妹も私も返事はしませんでした。どの位過ぎたか大きな門構えの家から女の人が出て来て「そんな所に居てはあぶないから中にお入りなさい」と言われた時はとても嬉しく感じました。でもどこにいても死ぬのは同じだから引き返そうと言ってもと来た道をもどりましたが、その途中で本門寺の方からぞろぞろと私達と反対に逃げて来る人達に逢いましたが、その中で男の人が顔に火傷をしていて「アツイよ、

アツイよ、助けてくれ」と言っているのですが、私達にはどうにもできずただ母をかばっているのが一杯でした。その次に見たのは男の人がおばあちゃんを背負って逃げているのですが、そのおばあちゃんの背中が燃えているのです。背負っているのは息子さんだと思いますが、そのおばあちゃんは私の見たところもう死んでいる様に思いました。ただ息子さんの背中にしがみついているだけで全然動いている様に見えませんでした。後で聞いた話ではやはり亡くなったそうです。その後私達も本門寺まで行かず引き返し家の方へ行くつもりでしたが、色々の情報により焼けてしまってあとかたもないと聞き、仕方がないので三人で足のむくままとにかく火の手の上っていない方への進んで行くと、あるお寺の様な所に着きほっとしているともうたくさんの人がごろごろと毛布にくるまり寝ていました。さっそく私達もそこで一晩お世話になりました。夜も明けて次の日、お昼近くになり炊き出しのおにぎりを食べているところへ、顔を真黒にして目が真赤になった父が布団を一枚持ち先祖の位牌と時計をくるみ「やっとさがしたよ」ともどってきました。それから父と二人で焼けたと思う家を見に行きましたが、やはりあとかたもなく焼けていました。帰り道はどこをどうして歩いたか、ただ涙が流れる様に出て拭いているどころではなく泣きっぱなしで母達のいるお寺に戻りましたが、これからどこで暮していくのか本当に困り父も頭を悩ました結果、もと住んでいた焼けない知人の家の親威の家にお世話になる事になり、応接間の一部屋を借り住む事になったが、母の体を心配し皆で相談した結果、弟達のいる茨城へ疎開させました。その後父と妹と三人で生活が始まりましたが、何一つない私達ですから配給になった品物や食料で長い間世話になる事ができず、こんどは一ケ月程、又一ケ月と世話になり自分の家が焼かれてから何回となく空襲にあい逃げのびてきましたが、私の勤めていた会社も焼け事務所の整理をしている時、父が入ってきて「今日はお昼に大切なラジオの放送があるから私も会社に行ってくるから」と言って帰って行ったが、大切な放送って何だか私には良くわかりませんでした。父が会社から帰ってきて聞いたところでは、日本が負けた、戦争が終った、と言葉少なに言って、その後父は泣いていました。それから数日後、父と妹は母達のいる茨城へと疎開して行きましたが、私は会社の方針で疎開先の栃木県まで付いて行き、そこで私も寮生活が始まりました。栃木の人達もとても良くしてくれてわずかな日々でしたが楽しく過せました。食料と言えばサツマ芋に麦がへばり付いている御飯でしたが、とてもおいしく感じました。少しでも芋がたくさんあるのを見つけてテーブルに着くのが楽しみでした。会社ごと栃木県に疎開しても仕事はなくただぶらぶらしている日が続き、何のために付いてきたのかわかりませんでした。それから二ケ月程して解散する事になり栃木の地を後にしました。別れる時は男の人達も泣きました。姉妹の様にしていた友達もそれぞれに親の元へと帰って行きました。私も母達の疎開している所へ帰ったのですが、荷物をまとめているうち夕方になり、駅に着いたら最終電車だったので二里近い田舎の夜道をどうして歩いて帰ろうかと思っていると、親威の復員してきた叔父さんが自転車で迎えに来てくれていましたので本当に涙が出る程嬉しく感じました。母達のいる家へ着いたらほんのりとランプが付いていました。狭い部屋だなあと思ってはいましたが間もなくつかれが出て寝てしまったが、次の日起きてびっくりしました。四本の柱に板を並べて荒縄で組み蓆(むしろ)が敷いてあり六畳程の小屋でした。前方には戸もなく大きなすだれが下げてあり、たった一枚の雨戸で出入りして住んでおり、「これでやっと親子六人が揃ったね」と母が言った。本当にこれから

どうして暮していくのかなあと不安だった。でも妹は村の農業組合と言う所に勤めていた。それから父も家の前に炭焼き小屋を作り近所の農家に分けてやりわずかなお金をもらい生計を立てて、母も病を忘れた様に近所の農家や知人宅に手伝いに行きお米等を戴いてきた様です。私もいつまでもぶらぶらしていられないので知人の世話で埼玉県の家にお手伝いさんとしてお世話になり給料を戴きましたが、決ったお金がほしく東京に働きに行きたく父に相談したが聞き入れてくれず数日を過したが、ある日新聞広告を見ていると一日の給料が一万円と言う喫茶店の募集を見て父に内緒で正月三日に新宿へ面接に行く事になりましたが、新宿へ着いた頃はちらちらと雪が降ってきました。やっとたずねて着いた店はキャバレーでした。狭い階段に靴やサンダルが二十足位並んでいました。「戻ろうかなあ」と迷いましたが恐る恐る上って行くと、一人の男の人が椅子に座っていたが私の履歴書を見てうなずいていたが「こういう勤めは初めてだろう。あなたの様な人はもっとすれっからしにならないと勤まらないよ。もっと考えてそれから出なおして来なさい」と言われほっとした。一万円にあこがれ応募した自分が馬鹿だなあと悟りました。それから上野にもどり電車に乗ったが取手の駅で寝過ごしてしまい一つ先の駅まで乗り越してしまい最終電車でもう戻る事ができずうろうろしていると、駅員さんが寄って来て一晩駅に泊って明日帰りなさいと言って駅長室に連れて行ってくれ本当にお世話になりました。家へ帰ってから次の日、お礼の手紙を出しました。それからはただあせるばかりで田舎の事で勤める所もなく、父は炭焼きを一生懸命やっている様でしたが胃の具合が悪くなり八月の下旬他界しました。父は五十一才でした。それから私と妹は弟達がまだ小さいので体の丈夫でない母でさえ農家に手伝いに行っているのだからと思っていたところ、知人の世話で村の共済組合と言う所に勤められやっと収入を得る事ができたと思ったら、妹が結婚する事になり嫁いで行きました。その後も慣れない百姓の仕事を母と一緒に一生懸命頑張り弟達の義務教育だけはと思っていた時に体の具合が悪くなり心臓病で亡くなりました。四十八才でした。それからと言うもの少しの田畑ではありますがやれるだけやろうとできない百姓を勤めながら弟達をはげまし過してきました。そしてすぐ下の弟が中学三年を卒業し上京し勤めてくれたのでその下の弟と二人きりの淋しい生活が始まりましたが、慣れない田舎の生活で本当にどの位苦労したら世の中を渡れるのか、なぜ私達だけこんなに苦労するのだろうと毎日をうらみました。でも妹は幸せな結婚をしてくれたので安心しましたが、もう一人の弟も中学だけはと思い一生懸命やってきました。そのうち知人の勧めで二十八年に結婚する事ができ、下の弟も中学三年を終る事になり、それぞれ苦労はありますが戦争中の様に食べ物の不自由もなくなり、今こうして船橋の地で平凡ではありますが年をとっております。